# 童

2011.5、31

里山の森に一点、紫色が際だって、何やら香しい匂いが流れてくる季節となりました。上溝桜の香しい匂いを後にすると、藤の花の季節が到来です。ちょうど、この頃、周辺の草刈り作業が始まります。まさに、農繁期到来です。身も心も本格的に、春盛りとなります。

子ども達も、躍動感溢れる身体と落ち着き始めた精神で、この季節を楽しみ始めました。５月から新しい仲間も増え、一ヶ月遅れてきた新学期をわいわい楽しみ、更に活気溢れる大地がやってきました。鯉のぼりが舞うように、外のスロープでは、緑の絨毯の上で子ども達が華やかに舞うように軽やかに遊び、葉を茂らせた木の上や木陰で子ども達が佇み、砂場からは、泥遊びに興ずる子ども達。室内では、人形劇を演じ、木材や布や椅子などで、様々な基地を作って遊ぶ子ども達。日毎に、わらべ歌のレパートリーがどんどん増えていく子ども達。

樹木が日毎に葉を繁らせていくと同じように、どんどん吸収して繁り、大きくなっていく子ども達の季節到来です。

## 【親を越す】

海外を旅している長男は、現在インドに滞留して、登山、トレッキングと瞑想沐浴などの動と静の世界を交互に楽しんでいるらしい。アメリカに続き、２番目に長期間、滞在している。７月には、長女がインドへ兄に会いに出かける予定。小さい頃から４人兄弟仲がよく、この兄妹も格別で、人生の相談相手にもなっている。私に似て、頑固でマイペースな娘に対応するのは、この長男の懐の大きさと優しさであろう。親ばかであるが、長男は、本当に素晴らしい人間に育っていると思う。親を完全に越えて、人間的にも私たちが尊敬と憧れに値する、そして、親から大きく離れてしまった存在になってしまったと感じる。幼い頃の光景が幻のように思えることがある。

もう海外へ雄飛してから１年以上経つ。絵はがきの枚数がものすごく増えた。長男は、家族５名に、定期的の順番に絵はがきを送ってくる。兄弟には、必ず、お前の人生を応援しているという内容を添えている。長女の頑固でこだわりの生き方、次男の限界まで打ち込むテニス三昧の日々、三男の新聞配りと野球に打ち込む姿に、いつも尊敬の言葉とエールを添えてくる。そして、「今、俺も、お前達に負けないほど、同等に懸命に生きていると。」親以上に、兄弟達は、兄を慕い、兄からの影響を受け、思春期の子ども達の、時折、兄とテレビ電話で話している姿は、まさに幼少期の兄弟そのものの光景である。

インドで先日、１０日間の瞑想を終えた後に、メールやツイッターで、親との長い葛藤を昇華できたと書いており、その後、言葉で直接親に感謝を述べたいと言って、連絡してきた。特に、父親への思い、存在、コンプレックスをずっと持ち続けてきた長男。、私も、初めての子どもだっただけに、「男の子はこう育てたい、こうしたい」という理想像を押しつけ、自分の思うように育てようというお仕着せや厳しさの中で育ててしまった。妻は「我慢してきた、そして、父親のそんな姿勢から守ってあげれなかった自分が情けなく　長男が不憫で仕方がない」と今でも言う事がある。それだけに、父親は、許し難い、受けいれがたい存在だっただろう。父親は、そんな過去を素直に子どもに対して謝る事は出来なかったが、長男は、瞑想を終えた後、先に、それを許してくれた。それは、深い愛だったと言って本当にありがとうと言ってくれた。その器の大きさと深い心には、親子関係、年齢を超えて、人間として敬服と畏敬の念を持った。

妻と時折話す。私たちにはもったいないほど、素晴らしい人間になったと。父親の重圧の中で、我慢しながら、のびのびと明るく育ったと。私は、自分の未熟だった子育てのせめてもの償いとして、長男が志をもって自分の人生を送るなら、足腰が丈夫でいるうちは、全面的に支援してあげたいと思っている。もちろん、他の兄弟も志があるならばそうしてあげたい。

次に、長女は違った意味で、兄と同じく、父親を越えてるが、まだまだ偉大な妻は越えられない。（兄は、妻を越えていると思う）父親に対しては、その器の狭さや性格やパターンを一段階上から冷静に見極めており、「しょうがないな、あの性格は」と分析して、対応しているように思える。一番私に性格が似ているだけに、自己分析も正確で、自他共に認めている処が面白い。父親が妻に敬服して、未だに越えられないように、娘もしばらくは越えられないだろう。

でも、自分に素直に、自分に厳しくそして自分に甘くを繰り返しながら生きている姿はとても気持ちがいい。高校を卒業して、ソロモン諸島に渡り、その後、岡山県のわらの家で研修をして、長野市のずくなしカフェで働き、まもなく、ここを辞めるらしい。そして、インドへ行き、それから、アルプスの山小屋で働く（山小屋は、面白い人達が働き、面白い人達が来るからいいらしい）と言っている。小さい頃から、家にいるのが大好きで、山登りなんて大嫌いだった娘が、山小屋へ行くなんて凄いことだ。それも、どこの山小屋を希望しているのかと聞いたら、日本一遠い温泉、どこから歩いても最低二日間かかる処だと知り、笑った。その場所は、私の行きたい№１の場所で、昨年の夏のｷｬﾝﾌﾟの候補地であった場所だったから、その縁に驚いた。果たして、娘はそこへ行くのか期待している。もし、行くのなら、この夏はここに決まりだ。そして、娘は、その後　全国の郷土家庭料理を学ぶために、小さい軽自動車のキャンピングカー仕様に乗って、各地の改善センターみたいな処を回り、その場所のおばあちゃん達に料理を教えてもらう旅に出たいらしい。

これを発行した３１日に、シンディが母親とやって来る。シンディはソロモン人で、大地で１年間お手伝いしてくれ、その縁で娘はソロモンへ行った。今度は、シンディが、自分の娘と母親を同行してやって来る。７月には、娘がソロモンで住んでいた処の娘が、たぶん大地でホームステイするかもしれない。娘の周囲の人間模様や出会いは目まぐるしい。それだけ、人を引きつけているのか、確かに、娘は何か不思議で魅力的な世界を感じる。面白い。２０才にして、自分の頑固な不思議な世界を持ち、この意味では、自分たちの２０才の頃に比べ、完全に越えている。

この娘が、インドへ行き、兄と会い、どんな風になるか、ある意味でとても恐怖である。「インドには毒がある」と言われている。「私は、もうインドから帰って来ないかもしれない」などと冗談で言ってるが、末恐ろしい。しかしながら、どちらの子どもも、大学には行かないが、心から行かなくても良かったと痛感している。学問を追究する価値はあるが、人間的に、そして、人生の深みを肥やすには、様々な方法や環境、世界があることを知った。私たち親は、皆が進学するからと言った感じで、１８才前後の人生を送ってきただけに、子ども達は、親を越えている。

しかし、まだまだ子ども達に越されていくことに、手をこまねいている私たちではない。私は、密かに海外冒険の旅に出るために、自転車体力トレーニングを再開し、長男に何処かで合流する。妻は、アイルランドをはじめ、若い頃訪れた場所を、娘と一緒に廻るらしい。でも、我が家には、まだ２人の楽しませてくれる子どもと、うさぎの夫婦と６羽のうさぎの子どもがいる。夫婦で出かける事は、しばらく無理そうだ。

★　**青山家の長男の世界一周ブログ　　http://blog.livedoor.jp/dream_stay_hungry/**　　よかったら見て下さい。